OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Constructional Analysis of There Sentences with Non-Be Verbs
Author(s)	三野, 貴志
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81937
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　三野貴志　）	
論文題名	A Constructional Analysis of *There* Sentences with Non-*Be* Verbs (一般動詞を伴うThere表現の構文論的分析)

論文内容の要旨

これまで様々な枠組みで、存在のthere構文に関する研究がなされ、多くの一般化（定性条件や述語制限）が提示されてきた。しかし、多くの研究はbe動詞を伴う存在のthere構文の考察に終始し、一般動詞を伴うthere構文に着目した研究は多くない。当然、個々の一般動詞が用いられた際の用法の違いに関する研究もほとんどない（例外は、Ross (1974)、López-Couso and Formoso-Rodríguez (2014)、Yaguchi (2017)など）。また、定性条件といった主語名詞の新旧に関する研究は非常に豊富だが、主語名詞の意味タイプに着目した研究は動詞の研究と比べてそれほど多くない。さらに、直示のthere構文の研究は存在のthere構文の研究と比べて、質・量ともに不足しており、直示のthere構文の振る舞いは明らかになってないことが多い。このような背景のもと、特定の一般動詞を伴う存在・直示のthere構文の研究はthere構文研究を進める際に必要になってくる。

そこで本研究は一般動詞を伴うthere構文の特徴を記述し、そこから得られた知見を構文文法の枠組みから考察する。具体的に言うと、一見存在や出現を表していないような周辺的な動詞を伴う三種類のthere構文（comeを伴う存在のthere構文(１)、音放出動詞を伴う存在のthere構文(２)、speakを伴う直示のthere構文(３)）を対象に、それらの表現が持つ特徴を大規模コーパス（COCAやBNC）をもとに炙り出し、それぞれの表現が他のthere構文から予測されない特異性を持つ、もしくは、十分な頻度を持つ、下位構文として定着していることを示す。また、(１)から(３)の表現が示す特異性は一見恣意的なように思えるが、全ての表現は「構文」として存在・出現を表しており、存在のthere構文もしくは直示のthere構文の語用論的機能をうまく果たす形で構文が形成されていると主張する。つまり、一見特異な振る舞いをするように思える下位構文であっても、上位の構文の語用論的機能を考慮に入れると、その特異性も全く恣意的ではなく筋が通ったものとなる。

(１)　a. There comes a time in life when you have to make a sacrifice for your country. (COCA)
　　b. Then there came a sound, a light tapping, as if rain was falling outside. (COCA)
(２)　[A]nd there rumbled all around Harry and through the church collective voices, seemingly almost shouting, “Thanks be to God!” (W. Cobb, *Harry Reunited*)
(３)　A: I can’t decide which clothes to buy. Should I just get everything?
　　B: There speaks a rich person! (作例)

本論文の構成は以下の通りである。

第１章では、導入として研究の目的と本論文の全体的な構成を述べる。

第２章では、there構文一般の先行研究を概観する。存在・直示のthere構文の動詞に課せられる制限は歴史的に厳しくなっている。例えば、先行研究（Pérez-Guerra (1999)、Biber et. al (1999)、Yaguchi (2017)）の調査によると、存在のthere構文は1700年以前までは一般動詞が全体の２割ほど用いられていたが、現代英語においては頻度が激減し全体の５％以下である。また、動詞のタイプ頻度も低下し、現代英語では存在・出現の動詞に限られるようになった。このように、there構文全体に占めるbe動詞の割合が増大し、それに伴い一般動詞の割合が激減する中で、特に一見存在・出現を表さない動詞を伴うthere構文がどのような振る舞いをするのかに関して本研究では調査する。

第３章では、構文文法の枠組みを概観する。本研究で扱う一般動詞を伴うthere表現は、個々の構成要素や他の構文からは厳密には予測できない特徴を持ち、比較的高頻度で用いられるため、構文として分析する妥当性がある。特に、本研究の目的に合致する具体的なレベルでの構文認定の重要性を指摘する研究（Croft (2003)とIwata (2008)など)を紹介する。また、構文理論においてプロトタイプ構文と上位レベルの構文が果たす役割についても概観する。

第４章では、動詞comeを伴う存在のthere構文に関して議論する。comeは、語彙的に移動もしくは出現を表すため、there構文で自由に生起することが可能であると予測されるが、実際の用例には大きな偏りがあることがCOCAやBNCを用いたコーパス調査から明らかになった。特に、現在時制のthere comesは時間表現が、過去時制のthere cameは音表現が主語に多く生起する。つまり、具体的な移動はcomeを用いたthere構文ではほとんど描かれず、抽象的・主観的な移動・出現が好まれるのである。本研究では、前者をthere comes a 時間表現構文（１a)、後者をthere came 音表現構文（１b）と名付け、その意味的統語的特徴を明らかにした。

there comes a 時間表現構文は格言的に使用され、(１a)の文は、「人には人生において国のために犠牲にならなければいけない時が来るものだ/あるものだ。」と訳される。ある人物が人生などを歩んでいく中で直面することになる一般的な出来事が従属節内で描かれるのがこの構文の特徴である。そのため、意味的な焦点は従属節内の出来事におかれ、特に重要であったり、深刻であったりする出来事が導入される。統語的にもthere comes a 時間表現構文は他の一般動詞を伴うthere構文と異なる振る舞いを見せる。一般動詞を伴うthere構文は一般的に否定文や疑問文で用いることができないとされているが、there comes a 時間表現構文は使用可能である（例えば、Yaguchi (2017)を参照)。このような特徴から、時間表現を主語にとるthere comesは構文として確立している。

there came 音表現構文は他の一般動詞を伴うthere構文同様小説などの書き言葉で多く使用される。小説などでは、場面を展開する際に様々な手法が取られるが、there came 音表現構文は場面の展開を円滑に行う機能がある。音をまず提示することで、その後に現れるであろう登場人物をうまく場面に登場させられる。このような特徴などから、音表現を主語にとるthere cameは構文として確立している。

本研究はさらに通時的・類型論的調査を行い、なぜthere comes a 時間表現構文とthere came音表現構文が定着しているのかを明らかにした。通時的には、二つの構文は比較的最近（19世紀の半ばから20世紀にかけて）高頻度で使用されるようになった。there comes a 時間表現構文が特殊な意味機能を義務的に持つようになったのも20世紀ごろからである。この理由として、中英語以降一般動詞のタイプ頻度が減少し、その後一般動詞の使用割合が減少していく中で、there構文の意味がbe動詞を伴うthere構文を中心として存在や出現を表す構文に特化し、動詞の意味が希薄で新情報の導入というthere構文の機能をうまく果たすことができる表現が好まれるようになったことが挙げられる。この主張は類型論的調査によっても裏付けられる。動詞の意味的制約が厳しく、存在・出現しか表すことのできない虚辞構文（英語のthere構文とフランス語のil構文)は、動詞“come”を用いた場合意味上の主語に時間名詞が多く生起するが（全体の約75%以上)、存在・出現以外の事態も表すことができる虚辞構文は動詞“come”を用いた場合でも様々な事態を描写できる。つまり、動詞“come”は英語やフランス語のような言語では存在動詞や出現動詞より周辺的な動詞であるため、虚辞構文で使用された際に使用が存在や出現に近い意味を表すように制限されるのである。通時的・類型論的調査から、there comes a 時間表現構文やthere came 音表現構文は多くの特異な振る舞いを示すが、その振る舞いはthere構文の語用論的機能によって動機づけられていることが分かった。

第５章では、音放出動詞を用いた存在のthere構文を扱う。音放出動詞は、その名の通り、音の「放出」を表すため、存在や出現のみを表すことができるthere構文とは整合しないように思われるが、これまでの先行研究の指摘通り、音放出動詞はthere構文でも適切に用いることができる。本研究では、音放出動詞がthere構文で用いられた際に具体的にどう振る舞うのかを実例を元に調査した。本研究の調査によって、音放出構文が典型的な自動詞構文で用いられた際には基本的に主語に音を放出する物体が生起するが（先行研究でも音を放出する物体が主語に生起する例文のみが議論される：(例) *The truck rumbled.* (Levin (1993: 105))、there構文で使用された場合は主語に音そのものが生起する割合が増えることが明らかになった。実際、本研究の調査では、用例２１５例中約半数の１１１例が例文（２）のように、音名詞が主語に生起していた。音放出動詞を伴うthere構文は一般動詞で用いられた場合と異なる主語の選択の傾向を示すため、本研究では、(2)のような表現は動詞クラスと名詞クラスを指定した構文として定着していると考える。

一般動詞とthere構文で好まれる主語名詞が異なる理由は、there構文が存在出現を表す構文だからである。音放出動詞の主語に音名詞が生起した場合、概念的に音は音を放出できず、代わりに、音の存在・出現を表すためthere構文の機能にうまく合致するためにthere構文では音主語の音放出動詞が好まれるのである。加えて、音はその性質から新情報として機能しやすいこともthere構文で好まれる理由である。実際、there came表現において音名詞が多用されることから考えると、音名詞は新情報の導入に向いていると言える。つまり、音放出動詞はthere構文で使用された場合、一見特異な振る舞いを示すのだが、その振る舞いはthere構文の語用論的機能によって動機づけられている。

第６章では、動詞speakを用いた直示のthere構文を扱う。具体的には、直示のthere構文では使用できないと一般的に想定されている動詞speakがどのような文脈で使用できるのかを考察し、there構文の主語名詞が発言しそうな内容が先行発話で述べられた場合に使用可能であることを明らかにした。（３)は、「お金持ち」の人がいいそうな発言を

受けて用いられている。この構文は会話の相手を特徴付ける働きを持ち、しばしば相手否定的に評価する。(1)では、「金持ちがなんか言っている」と訳され、相手の発言を皮肉っている。このように、直示speakを伴う直示のthere表現は他の直示のthere表現とは異なる制約が課せられ、異なる機能を果たすので、構文（there speaks構文）として確立しているといえる。

第４章や第５章で議論した他の構文と同様に、there speaks構文も構成要素や他の構文からは厳密に予測されない特殊な振る舞いをしているにもかかわらず、その振る舞いは動機づけれている。具体的にいうと、動詞speakは発話動詞であるが、ある特徴的な発言に対してthere speaks構文が用いられることで、発言者の顕著な特徴が場面上に「出現」したことを表す。つまり、動詞の選択に関してthere speaks構文は直示のthere構文として破格であるが、他の直示のthere構文と同様の語用論的機能を果たしている。

第７章では、第４章から第６章までの記述から得られた知見を構文文法の枠組みからどのように理論的に考察できるのかを検討する。これまで構文理論において具体的な下位構文の重要性が指摘されてきた。特に、動詞に着目した構文研究が行われてきたが、本研究で扱った表現は動詞だけでなく主語名詞や時制も指定した形で定着しており、より下位の構文知識がthere構文の振る舞いをとらえる際には必要であることが明らかになった。また、本研究は、下位構文の役割だけでなく、上位の構文・プロトタイプの構文の役割の重要性も指摘する。つまり、具体的な下位構文は様々な特異性を示すのだが、その特異性は恣意的ではなく、全ての表現が「構文」として存在・出現を表すことで、存在のthere構文もしくは直示のthere構文の語用論的機能をうまく果たす形で構文が形成されているのである。つまり、一見特異な振る舞いをするように思える下位構文であっても、上位の構文の語用論的機能を考慮に入れると、その特異性も全く恣意的ではなく筋が通ったものである。

そして、最後第８章でこの博士論文の簡潔な結論を述べる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　三野貴志　）	
	（職）　氏　名
論文審査担当者	主査　教授　早瀬　尚子 副査　准教授　小薬　哲哉 副査　教授　井元　秀剛

論文審査の結果の要旨

三野貴志氏の博士論文は、330ページにわたる大著であり、一般動詞を伴うthere構文の特徴を記述し、 そこから得られた知見を構文文法の枠組みから考察するものである。There構文ではbe動詞を中心とした存在や出現を表す動詞が中心的に用いられるが、本論文ではそれ以外の周辺的動詞を伴う三種類のthere構文（具体的には、comeを伴う存在のthere構文、音放出動詞を伴う存在のthere構文、speakを伴う直示のthere構文）を対象に、それぞれの統語的・意味的・語用論的、ジャンル的、文脈的特徴を大規模コーパス（COCAやBNC）をもとにあぶりだし、それぞれの表現が他のthere構文から予測されない特異性を持つ、もしくは、十分な頻度を持つ、下位構文として定着・認定できることを示す。いずれの構文も特異な振る舞いをもつ一方で、また同時にいずれもその上位構文としてのThere構文一般のもつ「存在・出現の意味」および「新情報を導入するという語用論的機能」を満たす形で構文ネットワークが形成されていると主張する。

本論文の構成は以下の通りである。

第１章では 導入として研究の目的と本論文の全体的な構成を述べる。

第２章では there構文一般の先行研究を概観する。 存在・直示のthere構文に生起できる動詞は現代英語ではほぼbe動詞及びその周辺に限られ、一般動詞の出現頻度が著しく少なく、その動詞のタイプも存在・出現の動詞に限定されていること、この点で、本論文で扱うthere構文が特異な位置づけにあることが確認される。

第３章では本論文が依って立つ構文文法の枠組みを概観する。本研究で扱う一般動詞を伴うthere表現が、 個々の構成要素や他の構文 からは厳密には予測できない特徴を持ち、 比較的高頻度で用いられるため、 構文として分析する妥当性があること、プロトタイプ構文の役割がその上位レベルの構文の意味に重要な役割を果たすこと、一方で下位構文の重要性が認識されるようになってきていること、について概観する。

第４章では動詞comeを伴う存在のthere構文を扱っている。comeは移動・出現を表す動詞だが、コーパス調査から、抽象的・主観的な移動・出現を表すものが圧倒的に多いこと、特に現在時制を用いたthere comesには時間表現が、過去時制のthere cameは音表現が、その「意味上の主語（以下では主語と簡略表示する）」に多く生起することを明らかにし、これらを下位構文として位置付けた。特にthere comes a 時間表現構文は格言的に使用され、意味的焦点は従属節内の出来事におかれ、統語的にも否定文や疑問文で使用されうるなど、他のthere構文とは異なる独自の特徴を強く見せる下位構文としての特徴をみせる。また、there came音表現構文は、小説などで場面展開を行う機能をもつとする。また、通時コーパスを用いて、中英語期以降一般動詞のタイプ頻度が減少していく中で、there構文の意味が存在・出現に特化していったこと、またその中でcomeの割合が高くなったことが観察される。また、フランス語・スウェーデン語など６つの言語における類似の虚辞構文についての類型論的調査を行い、使用できる動詞の意味的制約が厳しい言語（英語とフランス語）では時間表現が同じく主語に来やすい傾向を示すことも調査している。

第５章では音放出動詞を用いた存在のthere構文を扱っている。音放出構文では通常は主語に音を放出する物体が生起するが、there構文では主語に音そのものが生起する割合が高いことを明らかにし、これを音放出動詞クラスに加えて音名詞クラスとの両方を指定した下位構文として定着していると考える。このような偏りが見られる理由として、there構文がもともと存在・出現を表す、新情報を導入する構文であるために、その構文の意味機能から帰結するものであると主張している。

第６章では、There speaks a rich person!のような直示のthere speaks構文を扱っており、その主語名詞が典型的に発言しそうな内容が先行発話で述べられた場合のreplyとして使用可能な、しばしば皮肉として否定的評価を行うという特徴を持った特殊な下位構文であることを明らかにしている。この特徴は他のthere構文とは一線を画すものであり、その特殊性ゆえに下位構文として確立していることも主張している。

第７章ではこれまでの記述から得られた知見を総合して構文文法の枠組みから総括を行っている。近年構文文法では動詞を特化させた具体性の高い下位構文の重要性が指摘されるようになっているが、本論文ではそれよりもさらに下位に位置する主語名詞や時制、またその使用文脈も特化した具体性の高い下位構文も重要であることを主張することになる。また、それぞれの下位構文の特異性が、一般的なthere構文の語用論的機能をうまく果たす形で反映されていることも主張し、構文としての一貫性も保たれていることを示している。

第８章は結論である。

数多くの多岐にわたる先行研究を丁寧に概観し、その見解をうまく整理しつつ自分の主張と絡めて説得力ある形で展開した論考となっている。There構文のこれまでの研究はbe動詞を伴う存在のthere構文の考察に集中しており、一般動詞を伴うthere構文に注目した研究は多くはなかったことから、この研究の着眼点にその独自性が強くうかがえる。また周辺的と位置付けられる事例を細かく丹念に掘り起こして新しいデータを発掘・考察したこと、またその質的な考察のみならず、共時的コーパス、歴史的なコーパス資料、また多言語的コーパス資料を駆使しながら量的にも論を展開している点は高く評価される。さらに、言語データの考察を認知言語学や構文文法理論での近年の主張に絡めてthere構文の構文ネットワークをモデル化することも試みており、理論的な貢献としても一定の成功を収めていると判断できる。

博士論文の審査会においては、時制の違いを構文ネットワークに組み込むことに対する妥当性とその示し方についての異論、下位構文において一部の語彙のみが偏って選択される理由、構文と認定する基準、下位構文の特異性とその更なる拡張可能性についての説明などがもっと踏み込んでなされるべきという要望、there構文の下位構文同士の関連性に関する動機づけに用いているメタファーやfictive motionといった説明概念の不統一についての指摘、また類型論的な考察において導かれていた結論が、一部の下位構文のみの検討から得られたものであり、果たして他の下位構文やthere構文全体にどの程度当てはまるのかに対する疑義、などが指摘され、それに関連しての質疑応答がなされた。いずれも今後申請者によるさらなる考慮・改良が望まれる論点ではあったが、本論文そのものは現状において論文博士であったとしても十分と認められるクオリティのものであるとして、審査委員一同高い評価を下した。

以上により、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。